

# EPA候補者へのオンライン研修における自律学習支援

—インドネシア訪日前研修での実践—

大田美紀・平田佑和・江森悦子・竹田恒太・  
アンディティヤ アリ パムブディ

## 1. はじめに

本研修は、国際交流基金（The Japan Foundation、以下、JF）が実施している日本とインドネシア（以下、尼）との間で結ばれた経済連携協定（以下、EPA）に基づく看護師・介護福祉士候補者（以下、候補者）の日本受け入れ事業の訪日前の日本語研修である。研修の概要については登里他（2014）で報告がされている他、新型コロナウイルス感染症拡大への対応として、同じく JF が受託し実施しているフィリピン EPA 研修とともにコースをオンライン化した2020年度14期研修の取り組みについては、大田他（2022）で詳細な報告がなされている。

14期研修では、1）授業形態の反転授業化と、2）主教材の『まるごと 日本のことばと文化』（以下、『まるごと』）への変更が行われ、EPA 研修の主要な目標の一つである自律学習についてどのように支援を行っていくかが課題の一つとなった。本稿では EPA 研修のオンライン化に伴う自律学習支援の取り組みについて、とりわけ2021年11月から2022年5月にかけて実施された尼15期における成果と課題を述べる。なお、報告者は JF の派遣専門家であり、本研修においては教務担当者として携わった。

## 2. 訪日前研修における自律学習支援

### 2.1 対面研修時の自律学習支援

本研修の目的は、日本での生活や国内研修に必要な日本語能力と、日本社会・文化に関する知識を身につけることである。目標の項目として「日本語」「社会文化理解」「自律学習」の3つが設定されている。それぞれの具体的な内容として、「日本語」では基本的な日本語の知識と運用能力を習得することとし、初級後期修了程度を目標としている。「社会文化理解」では日本で生活するのに必要な生活習慣やマナーを学び、職場の習慣や文化の違いを理解することを目指している。そして「自律学習」では「基本的な予習・復習のやり方と自己学習の習慣を身につける」、「自分の学習を計画し、ふり返る姿勢を養う」という2点が目標とされている。訪日前研修で自律学習が重視されるのは、本プログラムに参加する候補者は訪日後に受け入れ先となる病院や施設で働きながら、看護師・介護福祉士の国家試験に合格することが求められ

るからである。訪日前と訪日後を合わせ、約1年の研修終了後は自分で学習を計画、管理しながら日本語学習、及び国家試験に向けた学習を継続していかなければならない。そのため、本プログラムの導入となる訪日前研修では毎日1コマ自律学習時間を設け、候補者の訪日後の長期的な学習を見越し、自律学習の習慣化と意識づけを行ってきた。

対面研修時の自律学習支援では、担当の講師が候補者と直に向き合いながら支援を行ったり、クラスの候補者同士で互いに学習状況をふり返ったり、学習方法を話し合ったりする機会もあった。また自律学習支援のためのツールとして、「学習の計画とふり返りシート」等のシート類や、学習成果物をストックしていくフォルダを提供し、訪日前研修を通して学習成果をふり返るための学習ポートフォリオを作成させ、候補者に自律学習の重要性を認識させてきた。

ところが、このような対面研修時に行ってきた支援は、オンライン研修では限定的にならざるを得ず、必然的に自律学習支援のあり方や支援方法、自律学習で利用するツールにおいて全面的に見直すことになった。

## 2.2 オンライン研修時の自律学習支援

オンライン研修では候補者の学習状況が把握しにくく、候補者とのコミュニケーションの機会も限られるため、対面研修時にも増して候補者には自律的に学習を進める力が必要となる。表1は候補者の1日の時間割である。1日7コマの研修時間が設定されているが、同期型（オンライン）でライブ授業を受けるのは午前、または午後の1日3コマのみである。残りの3コマは非同期型（オフライン）で各自が自律的に学習を進めていく。

毎日4コマ目はクラスでの自律学習（以下、クラス自律学習）であり、同期型クラス内ミーティングや、グループ学習、学習計画とふり返り等のクラス活動を行う。

1日3コマの非同期型の自律学習（以下、クラス外自律学習）の時間では、候補者は日本語学習プラットフォーム「JFにほんごeラーニングみなと（<https://minato-jf.jp>）」（以下、「みなと」）

等を用いて、同期型の授業に向けた予習を行う。同期型の授業では、候補者は既に予習しているため、確認や発表等アウトプットを重視した練習を行う。14期からのオンライン研修では、このように同期型と非同期型の学習を分け、反転授業で研修を進めている。この場合、非同期型のクラス外自律学習の時間を候補者自身が有効に使えていなければ、学習に遅れを取ることになる。候補者の自律学習能力が研修中の日本語力の成果に直結するとも言えるのである。さらにオンライン研修では、候補者の自律学習能力の伸長は各自のネット環境の安定性やICTリテラシーの影響を受ける。オンラインツールを使い慣れていない場合、その操作に手間取り、学習に集中することが難しくなる。また、オンライン上での情報を見逃したり、課題の提出に

表1 時間割

時 限	Aクラス グループ①	Aクラス グループ②
午 前	1	同期授業
	2	
	3	
4	クラス自律学習（同期）	
午 後	5	クラス外 自律学習
	6	
	7	

支障が出ることが想定される。そのため、ネット環境が不安定な候補者に対してヒアリングやアドバイスをしたり、ツールの使い方に不慣れな候補者のフォローアップをしたりする等、運営内で窓口を設け、研修期間中を通して対応できるようにした。

このように14期以降、オンライン上での自律学習支援のあり方やツールの使い方を模索しながら、運営スタッフ、教務担当者、クラスを担当する日本人講師、尼人講師が協力して支援を進めている。以下第3章では研修のオンライン化に伴う自律学習支援の変化に触れつつ、15期からの改善点や取り組みについて述べる。

### 3. オンライン研修における自律学習支援改善の取り組み

#### 3.1 尼15期訪日前研修の実施体制

表2は15期訪日前研修の概要である。14期同様にオンラインで行われ、候補者全員自宅から研修に参加し、講師も尼と日本の各居住地からオンラインで授業を行った。開講時プレイスメントテストの結果から、日本語学習歴のある候補者を既習下位、未習上位、それ以外を未習レベルに分けた。後半は、前半終了までのテスト結果を元に習熟度別に既習下位、

表2 尼15期訪日前研修概要

運営側の概要			候補者（研修終了時）	
日本人講師	32名	日本	人数	看護 16名
現地講師	17名	現地		介護 273名
教務担当者／調整員	4名／4名 計8名	現地		計 289名
現地スタッフ	4名	現地	クラス数	16クラス

※現地スタッフの内、1名は教務担当者、1名は調整員

研修前半（11月24日～1月18日）			研修後半（1月19日～5月27日）		
レベル	クラス数	実施形態	レベル	クラス数	実施形態
既習下位	2	オンライン 研修 (自宅)	既習下位	2	オンライン 研修 (自宅)
未習上位	2		未習上位	6	
未習	12		未習中位	4	
			未習中位下	1	
			未習下位	3	

※集合研修は尼人講師の授業のみ対面で実施された。

未習上位、未習中位、未習中位下、未習下位の5レベルに再編成した。14期と異なる点として、15期は研修後半から、より学習のサポートが必要と判断した未習中位下と未習下位レベルの計4クラス52名を研修所に集め、一部対面での集合研修を行った。集合研修では、尼人講師の授業は教室での対面形式となったが、日本人講師の授業は現地への渡航が困難であることから研修前半に引き続きオンラインで行われ、候補者は自室から参加した。クラス自律学習時間についても、尼人講師が担当する際は教室での対面形式で、日本人講師が担当する際は自室からオンラインで行われた。

#### 3.2 講師への支援

本研修では1クラスを日本人講師2名、尼人講師1名の3名で担当し、担当講師が話し合っ

え、「研修開始時」、「クラス替え時」等、各研修段階で行うべき支援についても検討した。またオンラインでも講師同士がつながりを持ち、クラスを超え情報共有や自律学習支援のための方法の検討ができるよう自律学習支援委員会（以下、委員会）を設置した。委員会では開講前には15期で使用する自律学習シートの検討を行い、期中は各クラスの取り組みや課題点を持ち寄り共有・検討を行った。各クラスの取り組みはオンライン掲示板である Padlet に自由に記入し、全講師間で共有した。さらに講師が自律学習に関する候補者向けオリエンを行う際は、直接教務担当者や他の講師に質問や相談ができるようオープンスペースとして Zoom を開室し、疑問点を解消できる機会を設けた。このように同期と非同期を組み合わせた場を通じ、講師のサポート体制を構築した。

### 3.3 自律学習時間の支援

#### 3.3.1 クラス自律学習時間

オンライン研修では候補者は、講師やクラスメイトとコミュニケーションを取る機会が限定的になることから、クラスメイトに対して同じ目標に向かう仲間という意識を持ちにくく、ピアプレッシャーが弱いこと、また質問がしにくい環境であることが考えられる。それらを解消し候補者の自律学習を支えていくために、クラス自律学習時間では「コミュニティ・つながり」といった関係性の構築と「個々へのアプローチ」の2つの側面の支援を重視した。

クラスコミュニティや関係性の構築を意識したクラスの取り組みでは、Zoom のブレイクアウトルーム（以下、BOR）の機能を使用し、「漢字」「会話」「文法」等、候補者が希望する BOR でグループ学習を行う、候補者が先生役となり分からなかった文法について説明を行う等、候補者同士が質問、相談し、互いの学習をサポートし合えるような支援が見られた。候補者一人ひとりに向けた支援では、オンライン授業での質問のしにくさや授業でのつまづきを解消するため、クラス自律学習時間内にオフィスアワーを設け、候補者が自由に講師に質問や相談ができる時間を設ける取り組みが見られた。また候補者の学習環境や学習に対する悩みを把握するために、必要に応じて個別面談を行った。こういった取り組みは14期から行われたが、15期では、面談の内容を Microsoft の Teams 内の面談シートに記録し担当講師間や教務担当者、調整員等運営全体で共有できるようにし、クラス替え後も引き継げるようにした。

#### 3.3.2 クラス外自律学習時間

研修は反転授業の形式であるため、1日3コマの同期授業以外、候補者は自分で学習を進めなければならない。14期ではこのクラス外自律学習時間の活用が候補者によって十分にできていなかったことが課題となっていたため、15期ではクラス外自律学習時間にチュータークラス（以下、Tクラス）を設置<sup>(1)</sup>し、同期授業以外でも学習する習慣を身につけること、「みなど」

や学習支援サイト「まるごと+（プラス）（<https://marugotoweb.jp>）」（以下、「まるごと+」）での予習の仕方を身につけること、そして、毎日の学習を繰り返る習慣を身につけることを目指した。

図1はクラス外自律学習時間の支援の流れを記したものである。研修前半はTクラスの対象クラスを未習レベルとし、対象クラス候補者は全員Tクラスに参加した。基本的な学習習慣がある程度あると判断した既習下位と未習上位レベルはTクラスの対象とはしなかった。

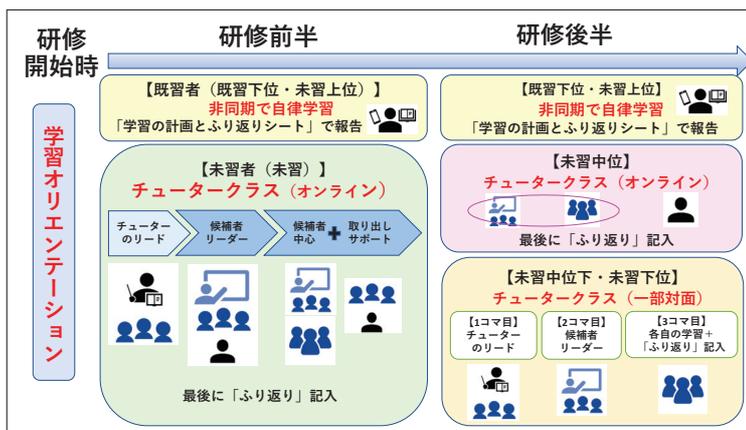


図1 クラス外自律学習時間の支援の流れ

研修前半のTクラスの支援は段階的に行い、研修開始時はチューターとなる尼人講師が「みなど」や「まるごと+」の進め方やポイントを示し、チューターのリードのもと予習を進めていった。その後はクラスの候補者がリーダー役となり予習を進め、チューターはBORを巡回しサポートや候補者からの質問に応じた。また最後にTクラスでの学習をふり返り、シートに記入する時間を10分程度設け、ふり返りの習慣化を図った。このような支援のもと、候補者同士で自ら学習を進めていける者がいる一方で、学習が思うように進んでいない候補者も見られ、そのような候補者には「取り出しサポート」として、チューターがリードをしながら予習が進められた。

研修後半は、Tクラスの対象を未習中位、未習中位下、未習下位レベルとした。未習中位レベルは、研修前半までに学習の習慣は身につけているものの、今後学習が進んでいくにつれ自力で学習内容を理解し学習を進めるのが困難になることを想定し、「必要に応じ仲間やチューターに支援が求められる環境を提供すること」を目的とした。基本的には候補者は自分で計画したことを進め、チューターはBORを巡回し候補者から質問があれば応じるようにした。未習中位下・未習下位レベルは、目的を「学習習慣を継続すること」、また自力で学習を行うのが困難な候補者が多いと思われるため、「チューターからの支援やアドバイスを受つつ学習ができること」とした。Tクラスのうち、1コマはチューターのリードのもと「みなど」や「まるごと+」を用いて予習を行い、もう1コマはリーダー役の候補者を中心に予習を進めた。その他、毎日1コマは自習時間とし、課題や自分が立てた計画に沿って学習を進めた<sup>(2)</sup>。

このように研修後半のクラス外自律学習時間は候補者のレベルに応じて目的と内容を設定し、とりわけ未習中位下・未習下位レベルの候補者にはクラス外自律学習時間に取り組むべき内容をより具体的に示した。

### 3.4 自律学習を支えるオンラインツールの改善

オンライン上で自律学習支援を行うにあたり、これまで紙で提供してきた自律学習シートやポートフォリオも14期からはデータ化し、オンライン上で使用できるようにした。なかでも、候補者の日々の自律学習を支えるシートとなるのが「学習の計画とふり返りシート」であり、候補者が1週間の計画を立て自分で学習を管理し進めていくための重要なツールである。「候補者・講師ともにアクセスしやすいもの」「ICTリテラシーの高さが異なるため候補者にとって親しみやすいもの」という点から、15期では委員会が中心となり検討がなされ、学習の計画をGoogleカレンダーやGoogleスプレッドシート、自分のノート等と候補者のICTリテラシーに合わせ自由に選択できるようにした。またそれらのツールを用いて各自記入した学習計画はクラスのPadletにアップロード、共有し、学習計画を一箇所に集約することで講師も候補者も確認しやすくした。他のクラスメイトの学習計画やふり返りを参考にしている候補者もあり、側にクラスメイトや講師がいない環境でも、候補者同士で学習計画やふり返りを支援し合える体制が可能となった。

ポートフォリオはGoogleドライブを使用したeポートフォリオへ変更し、候補者は自分のマイドライブにフォルダを作成して「私のeポートフォリオ」とした。eポートフォリオの中には「私のモチベーション」「自律学習シート」「成果物」「自分で入れたいもの」の4つのフォルダを作り、「自律学習シート」や成績、授業での成果物等を保管した。候補者のeポートフォリオはクラスの講師のGoogleアカウントと共有し、講師も候補者のポートフォリオへアクセスできるようにした。

### 3.5 段階的な目標に基づいた自律学習支援

オンラインでは、対面研修時のような講師からの直接の支援やクラスメイトの様子を観察し自己修正していく機会が少なく、14期ではオンラインでの学習計画やふり返りの習慣化が課題となった。15期では自律学習支援を「研修初期」「研修中期」「研修中期以降」の3つに分け、各段階での目標を設定し、それぞれに必要な支援をより意識した。ここでは各段階で行った支援について述べる。

#### 3.5.1 研修初期「学習習慣を形成する」

研修開始時オリエンの後、研修初期は講師がルールを引きながら、候補者はそれを真似ることで自律学習を進めていった。初期の学習計画は候補者に任せるのではなく、クラス自律学習時間で講師とともに行き、翌週のスケジュールを確認し、「みなと」や「まるごと+」といった指定された事前課題を学習計画に書き込んでいった。ふり返りも初期では宿題にせずクラス自律学習時間で講師とともに行き<sup>(3)</sup>、「よくできた」「できなかった」「難しかった」といった

感想の程度のふり返りでもこの段階では十分とし、Plan→Do→Seeのサイクルを体験することを通して、徐々に学習習慣を身につけていくことを目指した。

### 3.5.2 研修中期「学習成果をふり返り、今後の課題を見つける」

前半の研修終了時を研修中期とし、これまでの学習成果のふり返りを行った。このふり返りは「学習のまとめ」という授業として研修スケジュールに組み込んだ。授業の目的は研修前半までの自身の学習を肯定的にふり返ることで学習の成果を実感し、モチベーション向上につなげることで、また学習成

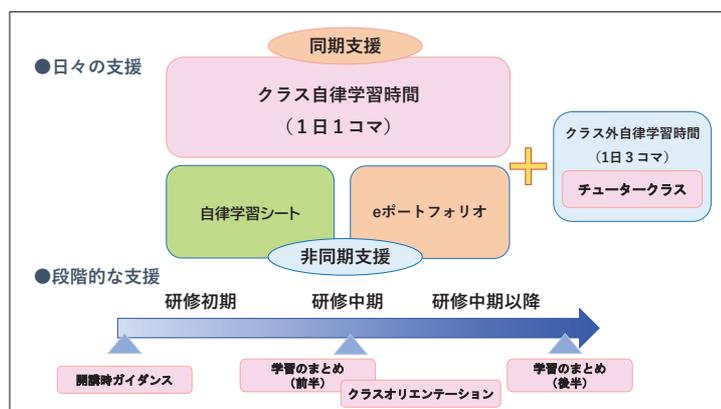


図2 2つの軸による自律学習支援

果をクラスメイトと共有することで新たな学習方法を知り、今後の学習に活かすこと、そして後半に向け自分の取り組むべきことを見つけることであり、候補者がここまでの学習に向き合い、主体的に関わる時間となることを期待した。事前課題として、ポートフォリオを整理し「頑張った」「できるようになった」ことが分かる成果物の一つを選びPadletにアップロードしクラスメイトに共有すること、また「どうしてその成果物を選んだか」「何ができるようになったか」「もっと頑張りたいことは何か」についてPadletに記入しておくことを指示した。授業では予め事前課題で準備したことをもとに成果物の良い点についてコメントをしたり、どのように上達したかをクラスメイトと共有した。事後課題では再度「後半の研修で頑張りたいことは何か」について考え、研修後半に向け自分の課題を見つけていった。

### 3.5.3 研修中期以降「学習内容や方法を自分で決定する」

クラス替え後は新クラスでオリエンを行い、自律学習の目標の再確認やクラス自律学習時間の使い方についてクラスミーティングを行った。研修中期以降は、講師は選択肢を提示したり、求められればアドバイスを行う等、候補者が自分で日本語学習の弱点や課題を見つけ、学習内容や学習方法を自らが決定していけるように徐々に管理を緩め、見守りながら支援を行った。学習内容やその方法を候補者が自分で決められるようになるには、自分の学習の弱点や課題が何なのかを自分自身で把握することが重要である。そのためにふり返りも初期の感想レベルから内容重視のふり返りへと深化させていく必要がある。このとき重要となるのが、ふり返りを深化させるための問いの投げかけである。講師は「何がよくなかったか」「そのために具体的に何をすればよいか」といった課題やその解決策が具体化される問いを投げかけ、候補者のふ

り返りが深化するよう導いていった。

その他、候補者が様々な学習方法を知り、自分に合った方法を選択・決定していけるよう、同じクラスの候補者や違うクラスの候補者、また、レベルの異なる候補者と学習方法について共有や相談をする「学習方法のシェア会」や、日本語学習の先輩である厄人講師の学習方法を聞く機会を作り、周囲を活用しながら自分に合った学習方法を拡大していけるよう支援した。研修最後には「学習のまとめ」として研修の成果をふり返る時間を設け、候補者は6ヶ月の研修の成果や課題を確認するとともに、今後の自律学習や日本語学習の課題を設定した。このように講師が主導かつ明示的な支援をしていた研修初期とは異なり、「場」や「リソース」の提供や考えを深める問いの投げかけを通し、候補者が自身の日本語学習に主体的に関わり学習内容や方法を自分で選択・決定していけるように支援した。

以上のように15期は、クラス自律学習時間とクラス外自律学習時間による「日々の支援」と研修の段階が進むにつれ支援内容の管理を徐々に緩めていく「段階的な支援」の2つの軸によって、候補者の自律学習を支えた(図2 2つの軸による自律学習支援を参照)。

#### 4. 15期自律学習支援の評価と反応

以上第3章で述べたように、15期では講師にもオリエンや委員会活動を通じた情報共有の場を作り、候補者の自律学習環境やツールをさらに整備し、日々の支援とともに段階的な支援も意識した。ここでは候補者へのアンケート、候補者のふり返りシート、及び講師のコメントから、15期の自律学習支援改善の取り組みへの評価と反応を見る。

##### 4.1 候補者アンケート

研修修了時にGoogleフォームによるアンケートを候補者に対し実施した。289名中285名から回答を得、回答率は98.6%であった。なお、自律学習の時間はクラスとクラス外の時間があるが、アンケートでは別記しなかった。コメントは任意での記入であった。また未習中位下クラスと未習下位クラスは習熟度が異なるが、どちらも後半は集

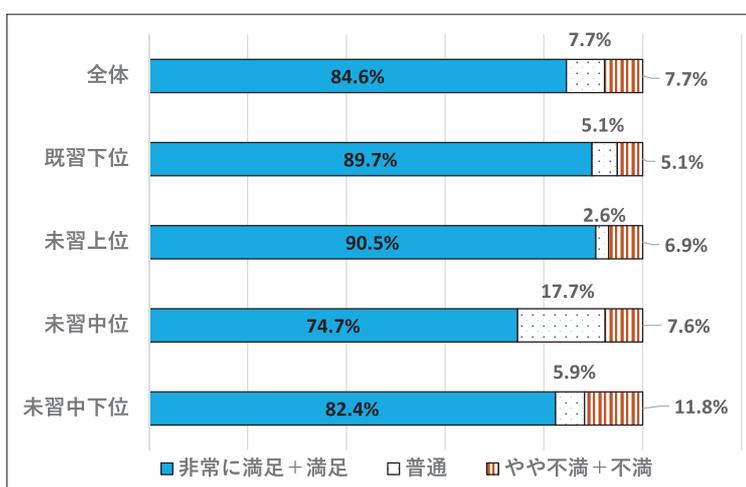


図3 自律学習時間の満足度

合研修と研修形態が似ていることと、未習中位下は1クラスのみで、アンケートの結果が未習

下位クラスと似た傾向であったことから、「未習中下位」と1つにまとめた。

図3を見ると、全体では84.6%の候補者が「非常に満足」「満足」、7.7%が「普通」、そして7.7%が「やや不満」「不満」と答えた。レベル別では、既習下位と未習上位レベルは満足度が約90%と高い一方、未習中位レベルは、満足度は75%未満と低く、「普通」という回答が17.7%と他のレベルより多い。未習中下位レベルは、満足度は80%以上と高めだが、不満足という回答も10~15%と他のレベルより高く、学習の習熟度により満足度が異なる傾向が見られた。

アンケートのコメントはキーワード別に整理し、カテゴリー化した。1人の候補者が複数キーワードに対するコメントをしているケースも見られた。肯定的なコメントは教材や講師の支援、また仲間がいることにより学習促進につながったという「自律学習の環境・ツール」についてのコメント（表3、1~5）と、自律学習習慣や学習方法、学習ストラテジーといった「自律学習能力」について（表3、6~8）、その他（表3、9~10）に分かれた。「自律学習の環境・ツール」についてのコメントは未習上位クラスが最も多く、次いで未習中位クラスと既習下位クラスから同程度見られた。未習上位クラスはTクラスがなく、非同期で反転授業のための予習復習を行ったが、クラスメイトや講師と一緒にのクラス自律学習時間の活動や「学習の計画とふり返しシート」、また「みなど」を中心とした自学用教材が自律学習に役立ったと感じているようである。

表3 自律学習についての肯定的なコメント

「自律学習能力」についてのコメントは既習下位クラスが最も多く、次いで未習上位クラスが多かった。その他のレベルからはごく少数で未習中下位が最も少なく、習熟度と候補者自身が感じる自律学習能力の成果が比例していると言える。否定的なコメントは少なかったが、「もっと仲間や講師と一緒に学習した

	キーワード	コメント例	計	カテゴリー
1	理解・学習促進	理解できるまで学習できる 予習と復習ができる	12	自律学習環境 ツール
2	学習計画 時間管理	学習時間計画が役立つ 勉強や宿題をする時間を管理できる	9	
3	仲間	できないことを共有し一緒に学習できる 友達とアイデアを交換し理解しやすい	5	
4	教材・システム 活動	教材とシステムはとて素晴らしい 教材が学習しやすい、自律学習の活動が楽しい	4	
5	講師	難しいときは講師に聞ける 分かるまで講師に聞ける	3	
6	自律学習習慣	自律学習できるようになった 自分で学ぶことに慣れてきた	9	自律学習能力
7	学習方法 学習スタイル	自分が好きな学習方法が分かった 自分の学習スタイルを作ることができる	9	
8	学習ストラテ ジー	自分の学習活動を評価できる より幅広い情報検索ができるようになった	5	
9	日本への準備	日本で働きながら勉強する準備にいい 日本では自分で勉強することもある	4	その他
10	満足・よかった	自律学習がよくできた 満足している、よかった	4	

い」というコメントが未習上位や未習中位クラスを中心に見られた。未習中下位クラスは、満足度は高かったが具体的なコメントは少なく、「満足・よかった」というコメントが52名中3名からあり、何が自身の学習に役立ったかメタ的な視点でふり返るのが難しかったのかと思われる。また「分からないことがあるとき、難しい」という否定的なコメントが1名からあった。

コメントの中にはTクラスに関するものもあり、研修前半のみ参加し、後半は未習上位クラスで学習した候補者からは「最初の時期に自分で学習するのに役立った」や、「友達と一緒に楽しかった」という意見が複数あった。後半もTクラスに参加した未習中位や未習中下位からは「学習内容の理解に役立った」というコメントが多いが、「学習の時間を作れる・管理できる」(中位)というコメントもあり、自律学習習慣を継続するのに役立ったと感じる候補者がいたようである。また「インドネシア人の先生と会える」(下位)や「どんな困難を抱えている場合でも役に立つ」(中位)という日本語学習の先輩であるチューターの存在を評価するコメントもあった。一方で「時間が長すぎ、疲れる」(中位)や「分からない文法があるときはTクラスを待たないといけない」(中位)、「顔を合わせて勉強すれば理解が深まると思います」(中位)、「Tクラスで何をしていたか分からないときがある」(下位)というコメントもあった。これら肯定的でないコメントは中位クラスから多く、満足度の低さにつながったのではないかと考える。

#### 4.2 候補者のふり返しシート

ここでは研修中期以降「学習内容や方法を自分で決定する」ことを促すための講師の働きかけと、その後の候補者のふり返しを見る。

図4は未習上位クラスの研修中期以降、11週目の学習計画のふり返りの例である。候補者は講師が提示した①「うまくいったこと」②「うまくいかなかったこと」③「改善案(どうすればうまくいくか)」の3つの問いに沿ってふり返しを行い、特に、②と③の問いを具体的に言語化することで課題を意識化させることを図っている。

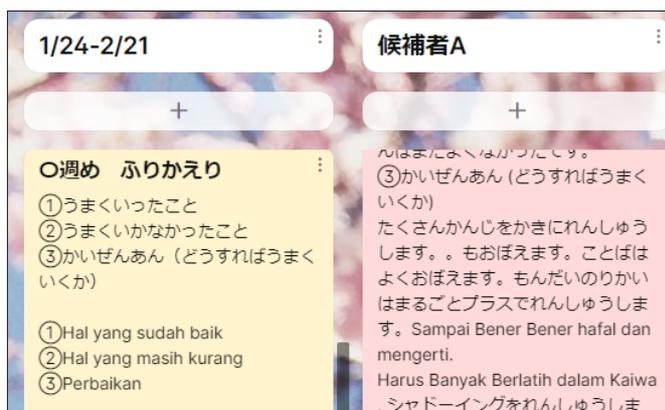


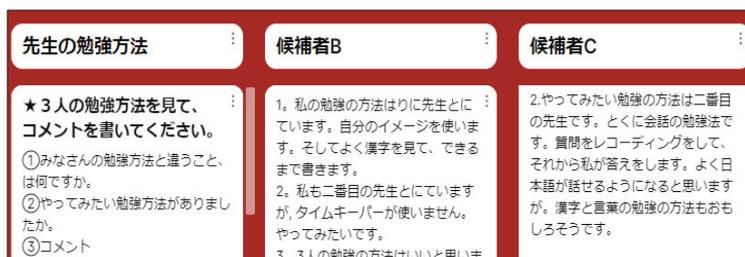
図4 研修中期以降のふり返し例①(11週目)

候補者Aの11週目以降のふり返しには、「語彙を覚えることが不足している」といった記載が多く見られ、研修を通じて語彙学習を課題と捉えていたようである。それに対する改善策について、11週目では「ことばはよくおぼえます」との記載に対し、13週目では「多くの語彙を覚え、話す練習の時に新しい語彙を使い、すぐに忘れないようにする」、17週目では「覚えにくい言葉は会話や文型で使うようにする」と、ふり返しを重ねていく中で「よく覚える」という抽象的であった学習方法から会話といった文脈の中で文型とともに使用することで定着を図るという具体的な方法へと変化していく様子が見られた。

図5は17週目に尼人講師が自身の日本語学習の方法を動画で紹介した後のふり返りの例であ

る。Padlet に書かれた候補者のコメントには、「私も二番目の先生とにしていますが、タイムキーパーが使いません。やってみたいです」「やってみたい勉強の方法は二番目の先生です。質問をレコーディングをして、それから私が答えをします。よく日本語が話せるようになると思います」等という書き込みがあり、候補者は尼人講師の学習方法を視聴しながら、自分の学習方法と同じ点や異なる点を確認したり、自分に合いそうな方法や試してみたい方法を選択したりしていることが窺える。

以上は既習下位と未習上位クラスの一部候補者の例であるが、講師からの働きかけでふり返りが具体化する、学習方法を選択する等、自律学習が促進されていることが分かる。



題提出に精いっぱいといった感じだった」というコメントがあり、習熟度別クラス編成の中でも学習内容の理解度に差が生まれ、予習や課題に時間がかかる候補者は学習計画やふり返りにかける時間的余裕が少なく、ふり返る力が養われにくかったのかと考える。

委員会議事録には学習計画やふり返りに用いるツールの改善について「講師にも候補者にも使用、共有しやすい」点で肯定的な意見が多く、また「使用ツールは選択制にしたが、友達の方法を見て、途中から変更していた」とのコメントもあった。Tクラスについては、「チューター制度があり、14期よりクラスの学力差が少なかった。オンライン授業では必要だと思う」（中位担当講師、14期も同レベル担当）や、「予習については、Tクラス等のフォローがあり、ほぼ問題なく授業前にできていた」（中位下担当講師）とのコメントがあり、中位以下クラスで反転授業を行うにあたって効果的であると受け止められたようである。

## 5. 15期自律学習支援改善の成果と今後の課題

オンライン研修においても環境やツールを整備し、段階的なアプローチを行うことにより学習習慣の形成は全レベルでほぼ達成できたが、学習成果をふり返り、課題を見つける力の習得は未習中位以上でないとなし、また同レベル内でも個人差が見られた。全体で研修の目標に向かいつつ、レベルや個人差を考慮し、目標に至るまでのステップを考えていくことが今後の課題である。15期Tクラスの試みは、研修前半で自律学習習慣を形成し、後半はそれを維持しつつ、複雑化する学習項目の理解や反転授業のための授業準備に役立ったと言えるが、その他の効果についての分析や改善点の検討も必要であると考え。今後も各クラスの試みを共有し、検討していきたい。

### 〔注〕

- <sup>(1)</sup> チュータークラスは14期も行ったが、研修後半に一部の遅進者に対してのみであった。
- <sup>(2)</sup> 尼人講師の出勤形態により、チュータークラスを教室で行う日もあれば、オンラインで行うこともあった。
- <sup>(3)</sup> 1週間のふり返りを行う他、特に前半はクラス講師の判断で毎日のふり返りも候補者に促した。

### 〔参考文献〕

- 登里民子・山本晃彦・鈴木理恵・森美紀・齊藤智子・松島幸男・青沼国夫・飯澤展明（2014）「経済連携協定（EPA）に基づくインドネシア人・フィリピン人看護師・介護福祉士候補者を対象とする日本語予備教育事業の成果と展望」『国際交流基金日本語教育紀要』10、55-69
- 大田美紀・早川直子・小川靖子・江森悦子・牟田綾・平田佑和・竹本恭子・竹田恒太（2022）「インドネシア人・フィリピン人看護師・介護福祉士候補者を対象とする反転授業によるオンライン日本語研修の実践—EPAに基づく訪日前研修の新たな取り組み—」『国際交流基金日本語教育紀要』18、71-82
- 神村初美（2019）「EPA 候補者へ向けた自律学習支援の取り組み—第8期フィリピン訪日前研修の実践から—」早川直子・石川晶子・國頭あさひ『介護と看護のための日本語教育実践・現場の窓から』171-191、ミネルヴァ書房